

林古溪「浜辺の歌」の謎

大月 和彦

いまも多くの人に愛唱されている林古溪作詞の「浜辺の歌」は、もと三番まである歌だった。大正初期に出版された当時はそれほど評判にならなかったが、昭和になってから流れるような旋律と追懐の感情がうけて次第に歌われるようになった。戦後教科書に掲載されると、誰一人知らない人がないほどの名曲になった。ところが作詞者は、三番の

はやち忽ち／波を吹き、赤裳の裾ぞ／濡れひぢし

病みし我は／すでに癒えて、浜辺の真砂／まなご今は

が、「原作の趣を失っている」として歌われることを望まなかったといわれ、この部分は削られた。その結果この名曲は一番と二番からなる歌となった。

古溪は哲学館(東洋大学の前身)卒業の詩人で漢文学者。長い間東洋大学付属京北中学で教師をしていた。企業OBペンクラブ会員で、同中学卒業生の関谷裕彦さん(故人)は二〇〇六年に、「浜辺の歌奇聞」を発表した。中学生の頃覚えたこの歌の三番の二小節目(赤裳の…)がどうしても思い出せないとかやしがる。戦後出版された唱歌集に三番が掲載されていないことを不思議に思い、母校を訪ねた。校庭の隅にあった歌碑は作り替えられ、真新しい御影石には一番の歌詞だけが刻まれていたという。

古溪の意思で楽譜や歌碑から三番が削られたことについて、関谷さんは、次のように推測する。この中学は、哲学館の創立者井上円了博士が、明治天皇のご下賜金で創った「きわめて物堅い学校」だから、三番に「赤裳の裾」が出てきて女性の存在を匂わせ、「秘めた恋心的な部分」が不適切な表現と判断したのかもしれない。

この推測の当否は別にして、三番の難解さはどうしたことか。最後の二行「浜辺の真砂まなご今は」は意味不明だ。

古溪がこの歌詞を発表したとき、四番あった歌詞が編集の過程で三番の後半と四番の後半が入れ替わってしまったが、修正しないまま出版されたのが真相らしい。後日、古溪は「これではわけがわからない」と言っていた、と古溪の長男が証言している。